

空

襲



私の戦争体験記

小杉 正雄

本町二丁目

私は、昭和十四年四月に、東京電機大学の前身である電機学校を卒業し、目黒区三田にあった海軍技術研究所音響研究部（現在の防衛庁技術研究所）に採用され、終戦時は海軍工手でした。

昭和十六年十二月八日、開戦の詔書を聞いた時は、ついに来るものが来たという感じで、身が引き締まる思いがしました。

昭和十四年当時は、プロペラ飛行機全盛時代でしたので、私
が研究に携わったのは空中聴音機でした。この兵器は遠方からの爆音を早く聞き取る必要があるために、聴音機のラッパの型や騒音も少なくなめらかに動く部品等の研究を行っていました。

イギリス製やフランス製を解体し比較研究もしました。性能実験は、現在の成田空港旧宮内庁三里塚御料牧場や、川口市のNHKの放送所の高さ三二メートルの鉄塔上、箱根山等で行いましたが、やがて「レーダー」が開発され空中聴音機は時代おくれとなりました。

戦争が激烈になるにつれ、決戦用兵器も色々と研究されまし

たが、その一つに地中聴音機の研究がありました。これは鉄板に「マイクロホン」を取り付けて、地中一メートル位の所へ埋めて地上の音を聞く兵器でした。戦車や自動車等は遠方からでも聞こえますが、人の足音や話し声も聞きとる物でした。激戦のあった硫黄島や沖縄でも数千個、上陸地点と思われる海岸へ埋めたと聞いております。

敵機の空襲を受けるようになってから音響爆弾（有耳爆弾とも言いました）の研究をしました。原理は物理学の「ドップラー効果」を応用したもので、爆弾の先端に「マイクロホン」を取り付けて、飛行機の爆音を感じて作動し、最大の音を感じた時に爆発するものでした。これは敵機の上空から落下しなければ効果がなく、優秀な飛行機や飛行士が少なくなってしまうため、実戦に使用されたかどうかは分かりませんでした。

同じように音響魚雷（有耳魚雷）という兵器も研究しました。海軍の魚雷攻撃は百発百中と発表されていましたが、はずれるものもありましたので、かならず当たるようにとの考えにより

研究されたものでした。

魚雷の先端にマイクロホンを取り付けて敵艦に向けて発射した魚雷が、目標をはずれても目標の敵艦を追いかけて、かならず当たるといふ追尾魚雷でした。

理論は、船が進む時、船尾のスクリューにより海水がかきまわされ、泡が出来て、航跡の中の泡に超音波が発生し、その超音波をマイクロホンが感じて、それに向かって進むという魚雷でした。

この理論は、戦後はバブルスターという健康器具等に利用されています。他に防振ゴムという特殊ゴムの研究もありましたが、戦後は新幹線列車や大型旅客機等に利用されています。また軍艦に付けた水中聴音機は魚群探知器等に利用されています。

音響研究部が、沼津市下香貫に移転後の昭和十九年十一月三日、明治節の日に運動会を行っていましたが、見たこともない大型機が銀色に光りながら飛来しました。皆が珍らしがって見ているうち誰かが「敵機だ」と叫び大騒ぎになりました。この時に見た飛行機がボーイング B 29 爆撃機でした。この時が日本大空襲の序曲だったように思います。

それからは、毎日のように昼頃になると B 29 が白い飛行機雲を引きながら東京方面へ飛び去りました。後に大編隊の時は、沼津上空あたりで、日本軍のレーダーを混乱させるために多量

の細長い銀紙を撒きましたが、それがいつまでも空にキラキラ輝いていたことを思い出します。

B 29 爆撃機は、南洋のテニアン島から飛び立ち、富士山を目標に伊豆列島線を北上し、富士山上空あたりで、東は東京方面へ、西は関西方面へと飛んでいったそうです。

昭和二〇年四月二三日、昼頃弁当を食べていた時、いつものように一機飛来しました。例のように偵察飛行だと思った時、「ザー」と砂利道を自動車が高速で通るような音が聞こえ、次の瞬間「ドカーン」と強烈な破裂音とともに室内は埃でモウモウとなりました。とっさに弁当箱にふたをして室内を見まわしたら、同僚は机の下へ隠れていました。私は防空本部付の伝令でしたので、鉄カブトをかぶり、手拭を首に巻き防空本部へ行く途中、足元に長さ二寸位の黒い藁縄のようなものが落ちていましたので、なにげなく拾ってみましたところ、女性の三ツ編みにしたお下げ髪の一部でした（この髪の毛は後日、遺族にお渡し致しました）。

それから散華した方の体の部分を拾う手伝いを致しました。総員集合をして、人員点呼により七名の方の殉職が確認されました。その夜は防空当直だったのでお通夜に参列し、翌日燃料用古材をトラック一台に積んで沼津火葬場へ同行しましたが、終るまで四時間位は待っていました。爆弾は二五〇キロ一発で、落下地点は構内入口の自動車車庫の前。車庫は全壊し、直径十

メートル位、深さ五メートル位の摺鉢状の穴になっていました。役所の建物は異状なかったようですが、各部屋の煙突用のメガネ石は外側へ落ちんばかりに突出していて、爆風の強さをものがたっていました。

五月頃、三島海軍通信隊へ公務で行った時、米国の日本向けの短波放送を聞きました。内容は正確な日本語で、空襲の予告でした。「明日、何市、何市の内の一か所を攻撃します。目標は軍事施設であるが、爆弾には目がないからはずれることもあるので、この放送を聞いた人は、親類や友人に知らせ避難するように話して下さい。ではお国の音楽を聞いて下さい」と言って琴の六段や民謡を流しました。

当時は短波放送を聞くことは禁止されていましたので、このことは誰にも話しませんでした。

昭和二〇年七月十七日夜半、空襲警報と同時位に、空を圧するような重々しい爆音が海上の方から聞こえて、B29の大編隊がやって来ました。今夜は沼津だ、と思い海軍住宅の表へ出て見たところ、上空に落下傘を付けた照明弾が十数個、フワリ、フワリと下りてきて周囲は真昼のような明るさでした。その後象山から香貫山沼津上空に、焼夷弾に付いた布が燃えながら数しれぬほど落ちて来ました。その様は、灯の付いた提灯が並んでいるようで、昔聞いた狐の嫁入りの話を思わせるような光景に見えました。私は、三月十日、五月二五日の東京大空襲の話

を聞いておりましたので、どこへ行っても同じだと思って住宅の入口で空を見上げていました。住宅の前は田畑でしたので、そこへ落ちた焼夷弾はほどなく消しましたが、裏側の香貫山へは十数か所落ちて立木が燃えていました。香貫山の向こうの市内上空は真っ赤に染まり、その中に黒煙がまざり、焼夷弾と砲弾の破裂音が交錯して聞こえました。異様な空の色にも朝日が差し始めた頃、敵機も去り悪夢のような一夜が明けたので、役所へ行ってみました。役所は異状なく、住宅も無事でした。それから市内調査員に任命されてトラックへ乗り、市内を一巡して調査のかたわら関係罹災者をお見舞いしました。市内で焼け残った建物は駅と市役所と銀行ぐらいで、あとは全焼でした。

記録によれば、十六日午後十時三〇分から十七日午前零時三〇分までB29が約七〇機、死者三一八名、負傷者五九一名、被害家屋は一万二千一五四戸、全罹災者四万四千三八七名。

八月になってしばらくぶりに爆音が聞こえたので表へ出てみたたん、米国防闘機グラマンが数機飛び交い、突然、機銃掃射を受けました。とっさに地面に伏せたところ、一メートル位離れた横を数発銃弾が、土煙を上げて道へささっていました。九死に一生を得たとはこのことだと思いました。

昭和二〇年八月十五日、終戦の玉音放送を聞いた後は、秘密書類を三日三晩燃やして、機械類は沼津の沖合いへ沈めました。その二、三日後に、海軍戦闘機が飛来してビラをまきました。

それには、「厚木海軍航空隊は降伏せず」と書いてありますが、反乱もなく何事も起こりませんでした。

九月中旬、米軍総司令部が、海軍技術研究所音響研究部を調査に来ることが決まり、各科では焼却した研究報告書類をまた作り直す作業で一時多忙でした。私は説明用の図表やポスター等を書きました。

戦艦山城、巡洋艦、潜水艦、海防艦に乗艦したこと、体当たりした戦闘機のこと、海軍落下傘部隊や各地の航空隊へ行ったことなどの思い出が走馬灯のように浮びます。

海軍が解散するまで、各部屋では残念会という宴会が幾回か開かれ、私の海軍生活は終わりました。

日中戦争十年間、太平洋戦争四年間、数百万人の尊い命が失われた長い戦争が終わり、平和が来しました。現在の平和がいつまでも続くことを祈念致します。

